

## 〈論 文〉

## スピノザ——克服されざる哲学

鷺 田 小彌太

1. 1 ——《一生のうち、少なくとも一度はスピノザ主義の深淵に沈潜した人でなければ、哲学における真なるもの、完結したものに進むことは希望できない》(シェリング『近世哲学史講義』1827)

1. 2 ——《一般に注意されるべきは、思考がスピノザ主義の立場にたたねばならなかったことである。これが、あらゆる哲学的思索の本質的な始源である。哲学を始めるならば、まずスピノザ主義者でなければならない》(ヘーゲル『哲学史講義』)

1. 3 ——スピノザは、近代哲学を分かつ決定的点であるにとどまらず、哲学と非哲学を分かつ決定的点である、と相互に激しく対立したシェリングとヘーゲルによって評される。哲学と非哲学、もう少し広くいうと、思想と非思想を分つ原理をスピノザ哲学が内包している、とヘーゲルもシェリングも主張しているのだ。フォイエルバッハの言を借用していえば、スピノザ哲学とは、近代哲学のモーゼである、ということになろう。このように、近代哲学の、ひいては、哲学と非哲学の審判者であると過大的に評価されるスピノザは、その固有な意味において正当に受容されたか、という段になると、きわめて不満足な取り扱いしかうけてこなかった、といわざるをえないのである。研究量がおぼつかなかったとか、熱意に欠けるところがあったとか、敬意が払われなかった、というのではない。それらは十分すぎるほどに支払

われた。スピノザ死後、ほぼ 100 年をすぎるまで、禁断の果実であったスピノザ哲学は、いったんその封印を解かれると、まさに近代哲学・思想の全流派が、その思想のためにうやうやしい一章を捧げた、といっても過言ではないからである。

しかし、それらすべてに共通する傾向は、スピノザ哲学を「揚棄」の対象として、正確に言えば、シェリングやヘーゲルがそうしたように、自説を根拠づける始源(端初)＝原理として、したがってそれだけでは生動なき抽象的にすぎぬものとして取り扱ってきたのであった。マルクス主義においても、このスピノザ評価の傾向をぬけることはできなかった。否、より極端であった、といってよい。機械的唯物論者スピノザと弁証法的唯物論の萌芽としてのスピノザ哲学という両極評価の間に、様々なニュアンスの相違があるにもかかわらず、厳然としてあるのは、「克服」の対象としてのスピノザ主義という観念であった。

1. 4 ——この流れを変えたのは誰か。特定の思考者について語るためには、思想の対立の変化について語らなければならない。

近代科学・近代哲学（近代的世界観—科学主義と人間主義）・近代思想、の克服・超克は、つい最近お目見えのスローガンではない。およそすべての事例と同様に、哲学世界においても、新しい原理の提唱は、ただちに、それを否定する、超克する思考を生まずにはおかないものである。デカルト哲学に対する反対者として、ひとはすぐにヴィコ (Giovanni Battista Vico 1668－1744) を、その著作『新学問の原理』(Principi di una scienza nuova d'intorno alla commune natura delle nazioni, 1725) とともに想起するが、シェリングやヘーゲルがデカルトの延長線上でつかまえたスピノザもまた、反デカルト主義者で(も)あったのだった。あるいは、もう少し通俗的にいえば、ひとはデカルト(1596－1650)とパスカル(1625－1662)を対比させて、前者を合理主義(科学主義)の、後者を非合理主義(実存主義)の源流とみなし勝ちである。そういう認知はかならずしも誤っているわけではないが、しかし、デカ

ルト哲学の中に、デカルト主義の敵を、パスカルの中に、徹底した合理主義者を発見しえない場合は、やはり豊かな思考の歴史が内包する力動を学ぶところまでたどり着きえないだろう、と予測したい。

いま少し平たくいえば、こういうことだ。なぜに、デカルトが、「明晰・判明な認識」(*clara et distincta perceptio*)、分析的認識をもって「真」とみなし、その他の認識を「真」から排除する挙に出たのか、ということである。私は、分析的・要素主義的思考をもって「科学」(*scientia*)とみなす、現在あまねく流通している、文字通りの科学主義者をデカルトのなかにみいだすことは、きわめて困難であるといわざるをえない。逆である。当時、イデオロギー(イデア・ロゴス[観念・論])にすぎなかったのが、まさにデカルト哲学の原理であったのだ。デカルトは「偏見」(*pré-jugé* 先判断)を徹底的に懐疑の試薬にかけたが、まさに、デカルトの主張こそ「偏見」の類として抑圧の対象とされた当のものなのである。今流にいえば、デカルトが感性を理性によって抑圧したのは、そうしなければ、自らが提唱する理性主義が生きぬく境位をみいだしえぬ状態が当時の生きた時代意識であったからである。

きわめて短絡していえば、二十世紀、「明晰・判明認識」たる分析的・要素主義的科学が、まさに自己を反イデオロギーとして、すなわち、「科学」として全面定立する時代が到来した。デカルト主義の勝利である。いまや、理性は合理主義(理性主義)という最適状態の思想境位の中で、何の異和感もなく生存可能となったのである。もはや、「合理主義」は「偏見」の反対物になったのである。時代意識は、ここでは感性知を「欠如せる認識」として抑圧することになる。かく抑圧する・コントロールすることが、自明の「科学的態度」として受容されるに至る。科学主義の時代である。かつて、自らの存在理由を証明したり、説明したりする必要のなかった「感性知」が、自らのよってたつ理由を論証しなければならなくなる。それは、「理性」によって制御可能であり、あるいは制御されなければならないものなのかどうか、と自らに問わなければならなくなったのである。デカルトが「理性」による反逆であっ

たとすれば、「感性」による反逆が時代意識の<sup>アバンギャルド</sup>前衛部分を強くつかまえたのは、当然であった。

2. 1 ——マクルスは、ヘーゲル哲学なしにはその固有の思考を始めえなかった、というマクルスの述懐やエンゲルスの言明が誤っているわけではない。ヘーゲルが、スピノザの「実体」を近代哲学の始源として位置づけ、その発展ならびに揚棄こそ自己の哲学的立場である、と揚言したことときわめて類似した位置どりを、ヘーゲル—マルクスは持っている、というのも通説通りのこととして受けとってよいだろう。あるいは、いまだ十全にヘーゲル哲学を摂取していない点にこそ、マルクス主義の<sup>弁証法的</sup>唯物論（哲学）の最大の欠点ありとしたレーニンの言を肯定的に理解してもよい。その場合、焦点となるのは、合理的な学知を可能にするような科学的思考法をいかに構成するのか、というプロブレマティークである。私は、この問題構成が<sup>ナンセンス</sup>無意味であるとか、それ自体で誤謬を含むものである、とただちにいうわけにはいかない。しかし、それにしても時代錯誤なのだ。占星術をガリレオの地動説で論破する類のことがらに属する、といわざるをえない。

2. 2 ——『資本論』を経験主義的に、現実の経済過程の歴史的な分析であるとみなす見方に対して、『資本論』は資本家社会に固有な法則の概念体系＝学知（論理学）だという点を押し出すために、ヘーゲルの『論理学』に対応するところの『資本論』というところにアクセントをおいて、ヘーゲル—マルクスの連続性を強調することには、重要な意味があると考ええる。そのことをとくに強調したからといって、ただちに、マルクスにおける観念論的逸脱の再興をはかる試みだ、というように単純化するのはきわめて初歩的な誤りである。しかし、だからといって資本家社会を理論的にも実践的にも揚棄しようとしたマルクスの試みを、「論理の科学」の枠内にとどめて終りというわけにはいかないのである。中世世界の論理を近代合理主義的原理で克服しようとしたデカルトの試みに比すならば、近代的世界論理の総括者たるヘーゲルの論

理でもって、近代的世界像を克服しようとするのには無理があるのである。

もとより、ナチズムに特徴的な非合理主義的民族中心主義に対して、合理的人間中心主義を対置して、戦いかつ勝利におよぶということはある。また、そうすることはきわめて重要である。まさしく、ルカーチが『理性の破壊』で展開したようにである。(あるいは、『理性の破壊』はきわめて時局的かつイデオロギーッシュに勝ったプロパガンダであり、それでもってルカーチの思想本質を裁断するのは誤りだ、と強い反論を持つひとは多いだろう。しかし、『歴史と階級意識』においてもまた、一貫して、ヘーゲルの合理主義が厳然としてあることを否定する者はいまい。)しかし、ナチズムが近代合理主義的技術＝科学主義の徹底した遂行者であり、近代主義こそ、合理主義と非合理主義という、その生誕を科学主義にもつ双生児の成体＝総体なのであることを忘れると、とんでもないことになる、といたい。あるいは、きわめて単純化していえば、ナチズムこそ、近代合理主義の一帰結ではなく、主たる帰結であるのだ。

2. 3——マルクス主義を近代合理主義の一帰結たることから逸らせしめる理路はどこにあるか。ロシアにおいて啓蒙主義を、ブルジョア的文化を興すことこそを当面の緊急な避けえない課題であるとしたレーニンの準位にたちどまらずに、まさに近代主義を超える原理を獲得するためにはいかにしたら可能か、これこそ、平凡だが常に変らないマルクスの設問であったのだ。もとより、理論、思想闘争は、階級闘争の一翼を、本質領域を担っているからには、機械的唯物論にたちどまって弁証的觀念論をたたくよりも、弁証法的觀念論を十全に摂取して、機械的唯物論を克服することの方を重要とみなしたレーニンのいき方を、後退的であるという理由によって、その課題を闘争要素から分断するのは誤りであり、有害である。しかし、階級闘争は個々の勝利を占めるだけでなく、最終的な勝利を獲得するに足る論理を要するのである。そのためには、近代合理主義の総括たるヘーゲル哲学の根本原理を超出する試行者として、マルクスの思想立場を確定することが不可欠となる

のだ。

3. 1——決定的な転換は、きわめて厳格なとりあつかいをすれば、ルイ・アルチュセールとともにじまった。

«『資本論』はその対象においても、その理論においても、その方法においても、認識論上の真の転換を構成しているのか？ 『資本論』はひとつの新しい教説の現実的創設、ひとつの科学の現実的創設、——したがって、古典的政治経済学とヘーゲルの、フォイエールバッハ的イデオロギーとを拒否し、同時にその前史へ送りかえした、ひとつの真の事件、ひとつの理論の革命——ひとつの科学の絶対的開始を表明しているのか？ そして、この新しい科学が歴史の理論であるならば、それは、逆に、それ自身の前史を認識すること——したがって古典経済学とマルクス青年期の哲学的諸著作を洞察すること——を可能にしないのだろうか？ こうしたものが哲学的読み方によって『資本論』に提起される認識論上の問題の含意なのだ。» (『資本論を読む』〔1965〕1968)

アルチュセールは『資本論』が内包している「認識論上の真の転換」を、古典経済学ならびにマルクス青年期の哲学的著作を支配していたヘーゲル哲学からの転換（切断）を、スピノザ哲学を媒介にしてなしとげる、と宣言するのである。この「認識論的切断」を『資本論』に即して解明しようとしたのが、他でもない『資本論を読む』なのだ。

3. 2——『資本論を読む』初版（1965）の共著者であるピエール・マシュレは、ヘーゲル以前に、すでにしてヘーゲル批判をなしとげていたスピノザに焦点をあてて、かの「認識論的切断」の哲学史的意味をきわめて鋭利に切りとってみせた。『ヘーゲルかスピノザか』（1979〔鈴木一策・桑田禮彰訳・新評論・昭61.1〕）においてである。

マルクスとヘーゲルとのあいだに見られる歴然たる親近感、スピノザとヘーゲルとのあいだにも見うけられる。より強くある、といってよい。ごく

世俗的な点を一つだけ指摘すれば、マルクスは、青年ヘーゲル派の頭目たるブルノー・バウアーの推薦で、ヘーゲル学徒としてベルリン大学に職を得ることを強く望んでいた。その希望は結局かなえられることなく、一人の先例なき革命思想家が誕生することとなる。1816年、ヘーゲルははじめて大学に教職の地位を獲得する。46歳であった。このハイデルベルク大学の教授ポストへの招聘を、他でもない、1673年、スピノザが断ったのであった。ヘーゲルはこの招聘拒絶の事実を知ってはいたが、スピノザが招かれた大学へ、はじめての哲学者としておもむくことを、きわめて名誉なことと考えていたのである。

マシュレは、ヘーゲルにあって、スピノザにないもの、ヘーゲルがスピノザの不在＝欠陥とみなした論点を取りあげ、このスピノザの不在こそ、欠陥ではなくヘーゲルに対する「抵抗の積極的な指標」に他ならないとして、マルクスの「認識論的な切断」につなげるような仕方で論を展開する。たとえば、「否定の否定」である。この思考をスピノザは欠いている。スピノザは「否定の否定」というヘーゲルの弁証法を先取りして論駁しているというわけだ。だが問題はこの後にこそある。

《だからといって、スピノザがあらゆる弁証法を論駁していることにはならない。ヘーゲルの弁証法のなかでスピノザが論駁するのは、弁証法でないもの、つまりマルクスがヘーゲルの観念論と呼んだものではないか。〈そもそも弁証法なるものは観念論的で反動的である〉という観念は捨てなければならない。哲学的に何の役にも立たないからである。思考の物質的歴史にとっては、「そもそも弁証法なるもの」という表現は、まったく無意味である。真なる問とは、唯物論的弁証法と観念論的弁証法とを分離する境界はいかなるものか、そしていかなる条件のもとで弁証法は唯物論的になりうるか、である。この問いを措定するのをスピノザが助けてくれること、そして、この間に彼が或る内容を与えてくれることを確認しなければならない。いっさいの保証が不在のままで、絶対的に困果的な仕方で機能する弁証法。絶対的否定性の原理

は方向性を前提することによって弁証法を出発点から固定してしまうが、そうした方向性を持たない弁証法。〈どんな矛盾もそれ自身のうちに自らの解決の条件をもつから、権利上弁証法が関わる矛盾はすべて解消される〉というような約束を与えない弁証法。以上のような弁証法とは何であるか、何であるはずか」

アルチュセールが「構造的因果性」という概念で表現した、過程を決定づける必然性の論理、すなわち弁証法は、ヘーゲルの弁証法＝「否定の否定」とは根本的に異なるものである。

3. 3 ——『資本論を読む』が基本テーゼを示し、『ヘーゲルかスピノザか』で開示されたスピノザ的なものとは、デカルト的、ヘーゲル的な、近代市民社会の根本思想原理とは異質なエピステモロジー（非イデオロギー）である。ごく単純に言えば、多くの論者がそうみなしたように、科学の哲学＝認識論（Wissenschaft）であり、いま一つの論理学（Logik der Wissenschaft）＝「科学論」である。

ところが、当のアルチュセールは、時ならずして、1967 年『資本論を読む』イタリア語版で、『資本論を読む』の試みを「《理論偏重主義》的傾向」と自己批判するにおよぶのである。この突然ともいえる「変身」を、時局上のこととか、政治実践上のことによって説明するだけではまったく不十分である。前期アルチュセール——イデオロギーとしての哲学を拒否する——と、後期アルチュセール——イデオロギーとしての哲学を玉座につかしめる——との間に、あれかこれか、の二者択一の問題設定を立てることで終らないためには、スピノザ哲学評価の基本問題へとさらに深入りしなければならないからである。スピノザ哲学とは何かは、『資本論を読む』や『ヘーゲルかスピノザ』かによっては、その半身しか明らかにしえないのであって、より本質的な側面は手ずかずのままだに残っているのである。

4. 1 ——1960 年代以降、レヴィ＝ストロースやジャック・ラカンの名に結び



ついて、人類学や精神分析に新たな照明が与えられることになるが、ごく大雑把にいえば、そこで問題となっているのは、自然ならびに人間（社会）の「無意識」とは何か、についての新しい方法探究である。より単純化していえば、自然とは何か、という問題設定をもつ、「自然」復権論である。この場合、「無意識」とは「微小なる意識」（ライプニツ）というような、意識と質的に連続した、したがって「ぼんやりした・混乱した意識」の類として表象されるべきものではない。その類のものは、「啓蒙」（Aufklärung）によって「明晰・判明な認識」（能力）と化す性格のものなのであるから。それは、「理性」によって統制可能なものとしてある、あるべき存在だ、といってよい。

「無意識」を下位意識、前意識として把握するゆき方は、理性的思考と合理主義的近代科学技術を所有しない「非文明」「未開文明」社会を、下位社会、前・半（人間）社会とみなす近代西欧中心主義的思考（発展史観）と相似形をなしている。

ただしいい添えておけば、「文明」社会と「非文明」社会を比較・相対して、それぞれに固有な文法を発見する比較文化論的視角だけでは不十分である。

「非文明」社会とか周縁社会とは、「文明」社会の外側に、隔絶されてあるわけではないのである。およそその逆である。「無意識」の理論が解明しなければならなかったのは、近代理性・合理主義的な科学主義と人間中心主義がまさに、非合理主義と人間疎外の産み親であることを示すことなのである。問題の焦点は自然概念である。

4. 2——近代的思考は「自然」を復権したといわれる。とりわけ「人間的自然〔本性〕」をあるがままに承認しようという志向が顕著である、といわれる。しかし、どこまでもその「自然」は、人間精神（理性）によって統制可能なもの——変形・加工・構成可能なもの——として表象されているのである。ヘーゲルは断固としていったではないか。

「精神は、自己に対して非自立的な物質的なものを自由に貫徹し、精神のかかる他者におおいかぶさり、他者を真の実在なるものとみなさないで、これを

観念化し、媒介されたものに引き下げる》(『エンチクロペディ』 § 389 Zu.)

だから、

«この解放という絶対的真理の段階では、世界を前提されたものとして眼前に見いだすこと (das Vorfinden) と、世界を精神によって措定されたものとして産出すること (das Erzeugen) とは、同一のことである。また世界からの解放と世界での解放とは同一のことである。すなわち、仮象は真理の知として真理の形式へと純化されているのである。» (同右 § 386)

対象的自然をその必要性において認識し、それを人間の力によって改造することが全的に可能だとする精神こそ、すなわち、人間の認識と自然の統制には限界がないという強い信念にもとづいてこそ、近代科学と技術の驚くべき発展があったことをまず認めよう。さらに「第二の自然」たる人間の社会と歴史が、その自然の固有な本質把握にしたがって、構成ならびに統制可能なものと構想されて、はじめて社会＝歴史科学と技術が発進・前進しえたことも、かさねて認めよう。自然の全面的認識可能性と、その認識にもとづく再構成・統制可能性という二公準こそ、近代科学と技術をささえつき動かししてきた「情熱」であった。

4. 3——いうまでもないが、ここで「認識」とは厳密な意味でいえば「理性的認識」(「第二種の認識」〔スピノザ〕)、「概念的認識」(ヘーゲル、マルクス)のことである。「感性的認識」(「第一種の認識」)は、仮象、誤謬、偏見、臆見、総じていまだ知の形式に達していないものとして、統御の対象、抑制の対象とみなされるのである。自然の解放とは、だから、自然の理性によるコントロールと同義なのである。「未開」とはそのコントロールがいまだなされていない事態をさしてのことである。

4. 4——では「自然」は理性のコントロールに服したか。自然をあるがままに承認すること(＝自然の解放)と理性による自然の統御とは、調和点に達するような展望がひらけたであろうか。人間が恣意的に自然を Ausbeutung (開発＝搾取) したが故に、自然は人間に反抗し、かつ自然の荒

廃がもたらされた、という類の表象にとどまることはしまい。この表象によれば、恣意的というところにアクセントがあり、合目的かつ適正な開発は可能だという動かしがたい格律がその背後にひかえているからである。問題の核心は、理性による自然の統御が不必要であるとか、それ自体において不可能であるとかという点にあるのではない。そうではなくて、理性による自然の統御によって、自然の馴致、陶冶ばかりでなく、膨大な量の統御不能な「自然」（「無意識」）が蓄積されるということである。端的にいえば、理性の統御が、理性によって統御不能な「自然」を拡大再生産させる、という事態が生じるのである。

4. 5——人類学とか精神分析という学知の展開は、科学が排出するこの膨大な「無意識」の世界をこれまでの「科学」とは異なった仕方で解明してゆく必要から生じているのであって、二つながら、近代的学知の体系との「認識論的な切断」を問題核に持って登場したのは、当然であったのだ。

5. 1——アルチュセールの試みが、この流れと深いところでつながっていることは、すでに多くの論者が指摘している。このことは、なぜにアルチュセールが『資本論』のなかで「歴史の科学」を再構成するだけにとどまることを「《理論偏重主義》的傾向」とよんだかの含意を如実に示すのである。スピノザ的にいえば、「理性的認識」という領野にとどまっていたからである。

5. 2——スピノザは『エチカ』で認識の種類を次のように分類している。

《われわれは多くのものを知覚し、一般概念を形成する。すなわち、

一、感覚によってそこなわれ、混乱した、そして知性の秩序なしにわれわれに現われる個物から。したがって私はこのような知覚を、漠然とした経験による認識とよびならわしている。

二、記号から。たとえばわれわれがあることばを聞くか、読むかによって、ものを思いおこし、それについてある種の観念——その観念は、われわれがものを想像するときの観念に似ている——形成することから。

私は、ものを観想するこの二つの様式を、今後第一種の認識、言い換えれば、意見 (Opinio) あるいは想像知 (imaginatio) とよぶであろう。

三、最後に、われわれがものの特質について、共通概念ならびに十全な観念をもつことから。これを私は、理性 (ratio) ならびに第二種の認識とよぶであろう。》(第2部・定理40・注解2) (スピノザは、「第三種の認識」として「直観知」があるとするが、ここでは捨象しておいてよい。)

想像知は「虚偽の唯一の原因」であり、理性知は真である。しかも、スピノザは、意見＝私見＝世論にのみ従う人間を奴隷とみなし、理性にのみ従う人を自由人とよぶのであるから、他の啓蒙主義者と同様、理性による想像知(感性知)のコントロールをあるべきこと、なすべきこととして主張しているようにみえても、いっこうに不思議ではない。つまり、一寸見には、スピノザはデカルト主義の嫡流であるかのようなのだ。

5. 3——ところが、そうではないのである。スピノザは、感情を受動的な精神＝精神の受動的な働きとしているが、この定義の本意は、人間ははその外部の力によって支配されざるをえないこと、したがって、人間は必然的に隷属的存在である、というところにある。自己完結的な閉鎖系として人間存在があるのではなく、そのまったく逆であることを想像知は指示するのである。しかも、

「感情はそれと対立的な、しかもより強力な感情によらなければ、抑えられることも除去されることもできない。」(第4部・定理7)

だから、人間個体は、自己の身体をキイ・ステーションにして、外界との交鎖の中で、想像知を働かせているわけである。意見 (Opinio) とは世論である。この世論を媒介せずには、人間は動かされないこと、発動せしめられないこと、この世論の力に対抗しえる力は、理性ではなくて、別な世論である他ないわけだ。いま世論を習慣といっても同じである。いっそのこと、<sup>トラディション</sup>伝 統といおう。さらにいえば、<sup>ジイツテ</sup>習俗である。つまりは、人間と社会の「無意識」の領域に接続する部分である。

5. 4——スピノザの絶妙さは、この膨大な「無意識」に隷属している人々を無知者、奴隷として告発し、彼らを有識者、自由人へと啓蒙することこそ人間世界の解放コースである、とただちに短絡しなかったことである。「無意識」の世界を理性の法延にひきだして、裁断しなかったことである。その世界の「法則」を解明しようとしたことにある。この世界の「法則」は、「真理」(truth)という必然性によってではなく、「正」(right)という必然性(自然)によって構成されるべきはずのものとみなしたことである。

しかし、そうなると、虚偽と臆見に支配される習俗に従って人間は生きるべきだし、かく生きるすべしか持たない、とスピノザは主張していることになるか。そうではない。「無意識」の法則を理解した知は、虚偽でありかつ虚偽ではない。臆見でありかつ臆見ではない。それをより分かりやすくいえば、イデオロギーの科学といってもよい。マルクス主義にイデオロギー理論が不在である、としてアルチュセールが試みるのは、まさに、特定の「無意識」を自己限定し、それを超越する別な「無意識」の形式を提起することにある。そして、そればかりでなく、この「正」を展開してゆく理路のなかに、「真」にいたる方向をつねに探ることである。スピノザが、大衆が無知であり、誤謬と偏見にとらわれ、時に暴走し、非道に走ることがあったとしても、(厳密にいえば、あるがゆえに)、<sup>デモクラシー</sup>大衆支配を人間社会形成の最善のコースと考えていたのは、この強大な「無意識」の世界を前提していたからである。「自然」といってもよい。

6. 1——だから、アルチュセールは、スピノザ哲学に対してこういうのである。

«スピノザの「理論」は、イデオロギーならびにその時代の第一のイデオロギーたる宗教にかんして、それらを想像的なものと同一視することで、あらゆる幻想を退けた。と同時に、イデオロギーを単なる誤謬や純然たる無知とみなすことを退けたのである。というのも、スピノザの「理論」は、人間たちが

彼らの身体の状態によって「表現された」世界にたいしてとる関係にもとづいてこの想像的なものの体系をうちたてるからである。》(『自己批判の諸要素』1974)

これをアルチュセールは「想像的なものの唯物論」というが、唯物論的イデオロギー論といっても同じである。

6. 2——スピノザ理論から、その「理性的認識」においてばかりでなく、「想像知(力)的認識」=イデオロギー理論においても、アルチュセールがどれほど多くのものを負っているかは、次の定式をみれば一目瞭然である。

まず、イデオロギーについての総括的規定がなされる。

「イデオロギーは、諸個人の存在の規定的諸条件にたいする彼らの想像的な関係の《表象》である」(「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」1970)

ここでアルチュセールがいおうとしている第一のことは、イデオロギーには、諸個人の存在を統御する現存的な諸関係の体系が表わされているのではない、ということだ。それは、いわゆる現実に対応した表象ではないのである。幻想とか疎外物ではないのだ。そうではなくて、諸個人がその下で生きる現実的な諸関係にたいするこれら諸個人の想像的な関係が表わされているのである。ここから当然でてくるのは、だから、想像知によってもたらされる「歪曲」や「疎外」の原因を探るという仕方がやんで、「諸個人の存在の諸条件と諸個人の集団的個人的生活を統御する社会的諸関係にたいする諸個人の関係(個人的な)にかんする諸個人に与えられた表象は、なにゆえに必然的に想像的であるか、さらにこの想像的なものの本性はなにか」という設問が發せられるべきなのだ。

イデオロギーを「<sup>セクト</sup>宗派」を批判する道具として用いる歴史的慣行は、かくしてやむ。

そして、第二には、イデオロギーは物質的な存在をもっている、ということである。「無意識」とか「自然」とかいうのは、第一の「理性」——「想像知」との関係においてばかりでなく、物質的なものであるという、イデオロ

ギーの本性にかかわっているのである。ここで物質的とは比喩的な表現においてのべられているのではない。アルチュセールもいうように、物質とは、最終的にはすべて「物理的な」物質のなかに根をおろした、さまざまな様相をとって存在しているからである。

かかるイデオロギーの内在的な解明のためには、言語－記号論の世界に足をふみこまなければならない。その試みの一端はすでに示したので参照いただければ幸いである（イデオロギーの再認』第3章「社会意識論と言語」白水社・昭60）